創作（入選一席）

転機

山口正勝

「保安要員を除いた外は働きにこられることを拒ぶり致します」

ロツク・アウトのこんな掲示が会社の門に打付られてから、殆どの組合員は〈社研〉や〈歌う会〉に結集していつたが、江田は、そんなものに耳を貸すでもなく〝ゴナ〟のように家に籠り寝転んでばかりいた。

会社は口を開けば「労使は親子関係だ」と宣伝しているくせに、働く意志のある俺までいち様に職場を追立たし、「組合は又、年中行事のようにストライキばつかしやつてるじやないか？　チツトは息もつかせてくれ……」、こんな気持が彼をかたくなにしていたのだ。

江田は、おそい朝飯をすませ、薄暗い三畳の部屋に寝転んで読飽きた〝みいけ〟を骨ばつた顔の上に拡げたまゝ、頭を空にしていた。

すると入口の方で聞き馴れた前川の太い声が「江田君、情宣聞きに行かんかア」「今日は支部長がくるそうだよ、時間は十時からだつたろう！」

こう言つた前川は土間に立つた侭の姿勢で自分の腕時計を見、人の好い丸い顔をくづした。

江田は新聞を片隅に押やると、物憂げな恰好で立上つたが聞きに行く気はなかつた。しかし同僚の前川の誘いと、近所えの気兼ねから、しつこく勧める母の手前仕方なくチビた下駄を突かけると前川と外に出た。

情宣大会場の社宅広場には既に机が持出され、マイクも準備されていて演壇の机には地域分会の赤旗が掛けてあつた。

定刻ではあつたがまだ集まつた人は少く、地域分会の泉田と役員の松永がせわしくたちはたらいていた。

メガフオンを手にした行動隊員の山田が性急に駆寄るなり、分会長に何か囁くと又走り出して行つた。

突然！　江田達の横で〝けい肺〟のため一年位前から休業している掘進工の後藤が酒臭いかん高い声を撒き散らした。

「エーど奴もコ奴もなつとらん！　分会長！　モー何時と思ツトルカツ！」

「分会長は外のモンバ早う集めチ時間にやーピンヤーツと始めんかツ！　ソゲンコツで主婦会がドゲンヂヤ、青年会がドゲンヂヤチユウテ批判なデケンソ！」

矢継早にまくしたてる後藤の罵声を笑顔で受けた泉田はそれでもマイクのボリームを上げると早く集まるよう社宅の棟々に呼びかけた。

江田は〝後藤さんは又呑んで居るナ〟と思い、後藤の酒癖を知つているだけに、彼の感情を柔げる積りで「みんな時間ナ守らんといかんですねー」と笑いかけた。

後藤は濁つた眼で江田をにらんでフーツと臭い息を吐いて、「ウンそうじやツ」と言うなり眼の張つた赤い顔をふるわしながら右手を強く上げ下げして見得を切る恰好をし、

「この頭ドヤツもコ奴もフヤケトル！」

「こげんコツデ〝ロツク〟に勝てるかイ」

と反つて激昂しだした。

江田達が茫然としているとまだ会場に顔を出していない役員の名を挙げては誰彼の差別なく罵倒し煩を引吊らして悲憤慷慨するのであつた。そんな状態が暫く続いた後で、不意に「よしツ！　俺が一軒一軒廻つて引張つてくるツ」と気負込んで歩きだしたが後藤の背中はその語気の鋭さに比べて悄然として力がなかつた。

分会長の泉田が素早く傍の松永に耳うちし、松永は小さくうなづくと後藤のうしろから見えかくれに尾いて行つた。

江田は以外な発展に不安が湧いたが、酒臭い息をプーンと漂してそろそろとゆく後藤の背中にふと死んだ父の姿を意識し、氷のようなものがズーンと背筋を走つた……。

――今回会社が断行したロツク・アウトは現在迄組合が使つて来た部分ストの対抗策として……。眉の太い精悍な顔付の支部長が一語々々マイクによく透る声で闘争の重大さを力説している……。

江田はそんな言葉を耳では受け半ばは回想の淵へ潜みながら意識の底では亡父を温めて居た。そして後藤と言う対象を見出したことによつてはつきりと過去の父の苦悩が判る気がした。

「石の上にも三年」と言う言葉は炭鉱では実感ではなかつた。江田の父作造の場合がそうであつたように、「石の上三年の報酬は〝けい肺〟であつた」

炭鉱で、けい肺にかゝることは死を意味した。後藤は自分の肺が岩粉のために病巣のように蝕まれていることを知つている。そのやるかたない怨嗟がときとして酒を呑ませ、酔えば誰彼の容赦なく罵倒させるのではないか？　それは酒乱と言う変形されたレジスタンスだと思つた。

江田は父を回想して見、父の苦悩を透して後藤の苦悩がいまはつきりと判つた。そして江田は『この〝デヂル〟にも似たけい肺と言う職業病の前に新しくりつ然とした』

× ×

江田の父作造――。

その頃戦争は日を逐うてはげしくなり、殆ど連日のように警報のサイレンに脅される日が続いた。父達の現場でも同僚が次々とツル嘴を鉈に持更えて征つたが父には不思議に召集が来なかつた。

そんな頃酒に酔つた父は「人間の良カモンナ種馬に残れゲナタイワツハツハツハ」こんなことを言つては母のシゲを苦笑させたものであつたが、この頃から次第に父の眼は蝕まれていつたようだ。

そして新聞の論調が怪しげになつた頃には〝一億一心火の玉だ〟と言うかけ声が至上命令となつて鉱夫の意志も健康も全く無視した奴隷労働が強制された。

父の現場でも十時間ときには十二時間の交学通り隧の目を見ぬ突貫作業が強いられ、さらでだに悪化しつゝあつた作造の眼は採掘跡のようにガサついて、ジエージエー咳にならぬ咳につまる日が多くなつていつた。

江田はこの頃中学生であつたが彼とても国を挙げての動乱の世のその中の一人に間違いなかつた。江田達の学校でも例外なく学徒動員令によつて〇〇工場で働かされたが、何の技術も持たぬ学生の多くは重量物運搬が主な作業であつた。とき折鉄管の錆を落してペンキを塗り変える仕事であつた。そんなとき江田がハンマーを振るつて鉄管を叩くと頑鹿のもの程カーンカーンと澄んだ音が大空にこだましたが、中にはガラガラ震えるように濁つた音のする鉄管があつた。江田がこの鉄管の内側を覗くと極つて内側の錆がひどく、素手を差込んで触るとザラザラした朱錆が無数に掌に残つた。

江田は父親の肺臓の内部が恰度この鉄管のように岩粉がザラザラとこびりついていて呼吸機能を麻痺のように麻痺させているのではないかと連想して強い衝動を覚え求めて濁つた音のする鉄管を叩いて廻つた。そしてガラガラ震える奴にブツカルと一様に手を差込んで掌を朱錆でいつぱいにし……

「チエツこ奴も病気だ！」

この頃の江田はけい肺に関する医学知識とてさつぱりなくたゞ単純に父に想をはせてはその病気だけを呪つた。

――間もなく戦争が止んで江田は家に帰つたが、この頃から父の捨鉢な荒んだ生活が始まり、酔えば極つて誰彼の見境なく罵倒し、母のシゲが口を挟むとヤケに物がブツ飛んだ。母はたゞオロオロするばかりで近所えの謝罪に明け暮れした。

この頃父が呑んだものは殆ど闇焼酎ばかりでその品質も極度に悪かつたが、そんなことが父の死を早めた原因の一つであつたかも知れない？

「ヘン！　藪タレ医者が何を言うかツ！」

「酒を止メロツ！　馬鹿言うナツ！」

「この俺が死んでタマルカイ！」

「大きにお世話ダイツ！」

躯を波のようにゆりながらひげ面を震してこんな悪態をとめどなく喚くときの父は言葉の合間にヒエーヒエーと無気味な呼吸音がして吐く息が断絶しそうであつた

江田はこんな父の悪態を裏に避けて聞きながら、自分に対する拷問のように感じたりした。

× ×

「けい肺法案が国会を通過したのも……」

支部長のこんな言葉にハツとした江田は苦にかえると同時に支部長の顔を見、周囲の者をうかがつた。

「百四十三日の長計闘争の成果も団結がなかつたら白紙に還るのです……」

支部長がこう言つて話を結んだとき、三百に余る組合員と家族は一斉に拍手をおくり、期せずして頑張るぞーと気勢を挙げた。

会場は民族独立行動隊の歌がどよもし、ロツク・アウト何物ぞ！と言う気概に溢れていつた。

江田は、幾多のたたかいに〝映画やパチンコ〟にふけり、デモ隊を横目でにらんで来た自分を哀しむとともに、雷鳴にも似たきびしいものが全身を襲つた。

そして江田は、「今日も誓意の人々はガツチリスクラムを組んでいる、この堅いスクラムこそ会社のバリケードに打つ勝つ鉄の環だと思つた。

江田は朝と打つて変つた清新な足どりで大地をふみ、力強く〝民独〟の歌を口吟んだ。

「民族独立勝ちとれ
故郷三池工業地帯
再び焼土の原と化すな……」

（選評）野間宏

第一席は山口正勝氏の「転機」である。これは組合の活動に無関心だつた一人の青年がたまたま出席した情宣大会の席で、けい肺のために自暴自棄になつている休業者の姿を見ることから、同じようにけい肺のためにやけになつて死んで行つた父の運命を思い起し、労働者としての自覚を得ていく姿を描いている。

この作品のすぐれている点は、一人のけい肺患者のねじれた姿を生々しくえがくことで、炭鉱労働者全体の運命に迫つていることである。しかしながら、一人のけい肺患者の姿から同じ病気で苦しんだ父の運命を思い浮べることは自然に描けているが、そのことがたゞちに組合活動への積極性に変る転機は、十分にえがけていないと思う。それを描くには、組合に無関心であつたこの労働者の内容が、まずとりだされる必要があつたのである。

懸賞付き

頭の體操

【第一問】お昼休みに四人がキャツチボールをしていました。Aが時計をみて「おいもう一時三分すぎだぞ、急いで帰ろう」といいました。Bは「ちがうよ、三分前だよ」といい、Cは「まだ六分もある」というしDは「オレのは二分すぎてる」といいました。四人の時計は正しい時刻にそれぞれ二分、三分、四分五分ずつちがつていたのです。一体その時の正しい時刻は何時で、四人の時計はだれのが何分すすんでいたのでしょう。

【第二問】兄弟二人一〇〇米競走をしたら、兄がゴールインした時弟はゴールの三米手前だつたこんどは兄はスタートラインから三米さがつて競走した。さてどつちが勝つたでしよう二人のスピードは前回と同じとします

▲いづれも締切は八月二十日まで

前回の解答

【将棋】1三飛打　同桂　3二竜　1二玉　1二銀打迄（五手詰）

【頭の体操】第一回　(1)四時間半　(2)Aが一階で靴、Bが三階で本、Cが二階でブラウス、Dが四階で水着。(3)トンネルの長さ一寸二分。

第二回分　(1)寺鐘(2)相撲(3)切手(4)釘(5)タバコ(6)天井(7)遮断機(8)扇風機(9)吉(10)帯。

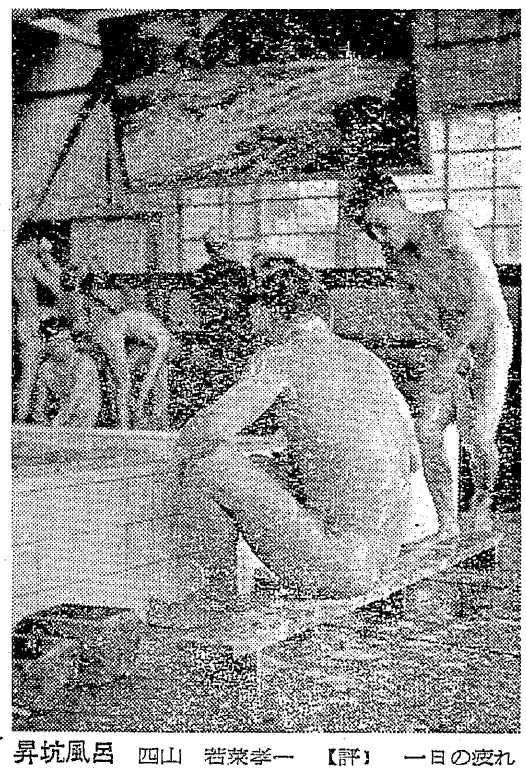
【詰将棋正解者】

松尾　英徳

【頭の体操正解者】

第一回分　大本昭治、新藤節雄（宮浦）岩山光義（三作）久々原豊（三作）古賀和代、秦野秀春（三作）東一士（宮浦）橋本虎之助（四山）坂口直行（宮浦）松田賢介（三作）

第二回分　中村美津子（本所）藤田紀男、島田ふじえ、岩崎多栄（三川）



昇坑風呂　四山　若菜孝一　【評】　一日の疲れを風呂でさつぱり流した情景を描写した所に、ローカルな感じが出ており気持のよい写真になつている。　F4　25分の1（選富士写真技術部）

詩・創作選後評

野間宏

創作　今度のコンクールに寄せられた作品は、二十一篇である。作品の数は毎回増加するものをみたしてくれるが、この二十一篇もまた炭鉱の労働のなかでつくりだされた重要な作品である。私はこの作品のつみ重ねが、結晶して炭鉱労働者の文学意識が変革される日がちかいことを予感しているが、それは全体の作品の水準が上つてきたことにもはつきりあらわれている。

作品は全体として、そのほとんどが、直接炭鉱の労働と、炭鉱労働者の生活に題材を求めている。とくに坑内の落盤その他の事故をあつかつたものが多かつた。このことは三池の人たちの関心がそこに集中されていることを示している。私はここに三池の文学のすぐれた特色を見ることができると考える。ただ作品としてこの問題をとりあげる方法として、小説として作りあげたものと、生活記録的な書き方とが見られたが、そのどちらにも共通した弱点として、事実の具体的な描写より、抽象的な説明の部分が多く、そのために作品の生々とした印象を弱くしている点があつたことを指摘しなければならないのである。短い枚数の作品の場合はとくにこの点に注意することが必要だろう。

詩　戦後十一年をむかえて特殊な一時期としての〝戦後〟をぬけだしたようだが、労働運動もとくに三池のたたかいを中心に、漸く大地に根をおろしはじめた感じである

文学の場合はどうであろうか。

戦後ばやはり混迷と躍動の十年間であり、そのいみで生命力の燃焼するロマンチシズムの時期であつた。いうなれば最も〝詩的〟な季節であつた。むろんその中で数千数万の詩人たちが、数十万、数百万の作品を書いてきた。ところがそれらの詩作品は果して、そのような期待に答えてくれるものであつたかというと、決してそうとばかりは言えない。むしろ〝戦後〟をぬけだした今後に、その実現を期待せねばならないのではないかという気がする。そういう意味でわたしは三池の人たちの詩を、期待を大きくして読んだ。

【入選一位】

人車

古門　明（三川）

停まつている人車
箱をねじまげた
その無恰好さを
下向きに
五寸巾の内部をひろげる。

松林の背板が骨をつき
その下をかいくぐつて
膝と尻とがぶつかり合い

人間落下防止の
錆びた鎖の感触が
横腹を通り抜け
坑夫たちの顔が
すごくゆがむ

ぼくはこんなに身近かく
不思議な
残酷さを感じた

錆くれた
水滴よけの鉄板
頭のつかえそうな天井には
坑夫が画く
ちせつな画
すぐ横で哄笑が起つた

ぼくはこんなに身近かに
坑夫を知つている

ぼくが笑つていると
ロープの伸びを感じ
ちつちやな胸のなかが
格斗をまき起し
はげしい勢いで
膨らんでゆく

【評】　古門明氏の「人車」は、乗車して動き出す瞬間までの人車とその周囲のふん囲気を描いている。多分に〝静的〟な描き方ではあるが、炭鉱労働者の躍動感があふれている。「さびた鎖の感触が横腹を通り抜け」という行はじつによいと思う。生命がけの人間の楽天性とでもいおうか。「坑内夫がえがくちせつな画」というのは、おそらくワイ画か何かであろう。ワイ画でも坑内ではおよそ卑ワイな感じは与えない、ここではそれは一種の芸術なのである。だから「ちせつな画」を具体的に描いていたら、そのあとの「哄笑」がもつと生き生きとしてきたであろう。「ぼくはこんなに身近かに坑夫を知つている」というところは気になる。傍観的である。

（野間　宏）